

連載

実験的教育論 [5]

本当にボランティア活動を 制度化してはいけないのか

まちだそうほう

広島大学大学院教授 町田宗鳳

「死を待つ人の家」で

大学の冬休みを利用して、インドのカルカッタにある故マザー・テレサの施設を訪問してきた。目的は、「死を待つ人の家」でボランティアをすることであった。それは、私が十人あまりの学者仲間と四年間にわたって進めてきた生命倫理に関する共同研究を締めくくる最後のフィールドワークでもあった。

当初はアメリカのスタンフォード大学でワークショップを計画していたのだが、その準備段階で書類を作成しているうちに、なんだか空しく思えてきたのである。学者同士が集まって抽象的議論をするシンポジウムなど、あちこちで開かれている。そんなことよりも、忍び寄り死を前にした人間に直接触れたほうが、よほど生命倫理についての思索を深めることになるのではないか。

そんなことから急遽、行き先をカリフォルニアからカルカッタへと百八十度転換することにした。いかにも私らしい突飛な行動に、慶應大学病院の医師と東京外国語大学のイスラム学者が加わることになったが、結果的に短期間の滞在からも学ぶことは多く、私の予感はずだった。

「死を待つ人の家」とは、容態の深刻な男女数十人の路上生活者を見つけては収容し、できるだけだけのケアを施す施設のことであるが、シスターたちやボランティアたちの介護の甲斐あって、収容された人たちの約半分が一命を取りとめ、そこを去っていくらしい。ベッドに空きができ次第、次の人が担ぎこまれてくる。もちろん、白い布に包まれて、静かに運び去られていく遺体もある。最近の日本では死に触れることがまれになってきたが、そこでは遺体の安置所が食器洗い場のすぐ横にあり、死を間近に感じるこゝろができた。

それにしても、コンクリート床が黒光りする部屋には目を背けたくなるような光景が展開していた。交通事故などで負傷し、その傷口が長期間にわたって放置されていたため化膿し、やがて周囲の筋肉が腐乱していく。そのような状況の人たちが、ところ狭しと横たわっている。

足全体がまっ黒な脱疽状態になり、そこに蛆虫がわいている人もいれば、腿の肉片が大きくえぐり取られ、危うく骨までがむき出しになりそうな人もいる。戦場でも行かないかぎり、ここまでひどく痛めつけられた人間の肉体を直接、目にするこゝろはあるまい。

「死を待つ人の家」は医療施設ではないので、本格的な治療はできない。できるこゝろは、毎日丹念に蛆虫をピンセットでつまみ出してから、消毒殺菌し、新しい包帯に取り替えることぐらいである。見ただけで卒倒しそうな傷口に向かつて、黙々と手当てしているのは、各国から集まったボランティア看護師たちである。日本からやってきた若い看護師も大いに活躍していたが、その尊い姿に思わず手を合わせたくなった。

この施設で働くこゝろは、あまり安全なこゝろではない。なぜなら、どんな菌に感染しているかわからない患者たちに直接触れるからだ。結核で咳き込む人もいれば、肝炎、腸チフス、マラリア、皮膚病などに冒されている人も多数いる。彼らの糞尿にまみれた衣類を洗濯するだけでも、それなりの危険が伴う。路上で長年、過酷な状況に晒されていたため、精神を病んでいる人もいる。

現に長期滞在のボランティアの中には、劣悪なカルカッタの生活環境の中で、病魔に襲われる人も少なくない。インドの医療施設は悪評高く、病気にかかったからといって、すぐさま病院に向かえばいいわけではない。腸チフスやマラリアにかかっても、ひたすら高熱に耐えて、ホテルの一室でやり過ぎすこゝろもあるそうだ。それ

でもそこに留まり、回復後は再びボランティアを続けるというのだから、恐れ入る。うら若き乙女たちが共同トイレしかない安ホテルに滞在しながら、毎朝、混雑する乗り合いバスに乗って、施設に通うわけである。

私が感心したのは、世界各国から集まるボランティアたちが、誰に指図されるわけでもなく、それぞれが自主的に役割分担し、黙々と働いていたことである。彼らの国籍、人種、言語、宗教は明らかに異なるが、そんなことが何の問題になるわけではない。ひたすらボランティアという立場で平等に、できることを仲良くやっていた。治療ができない者は、患者の食事、入浴、着替えなどを手伝い、それが済めば、洗濯、物干し、食器洗いなどに回る。そのリーダーなきチームプレイは美しい。

聞けば、マザー・テレサ自身が組織というものを嫌い、世界的に福祉事業が拡大した後も、事務局も銀行口座も設けることをしなかったそうである。個々の人間が神と向かい合い、祈りの心だけで行動していくことを願っていたのだろう。

隣人に手を差し伸べる

おおかたの日本人にとって、インドといえば仏蹟巡り

であるが、私がかつてブッダガヤにある日本仏教関係の巨大寺院を訪ねたとき、その空しさに心塞ぐ思いをしたことがある。なぜ、あんな無駄なものを建てたのだろうか。それが偉大な宗教事業だとしても、とんでもない勘違いをしたのだろう。

マザー・テレサは、「貧しき人の中でも最も貧しき人」にイエス・キリストを見出し、彼の「私は渴いた」という声を聞き続け、そこに愛を注ぎようとしたのである。相手は、異教徒であり、しかもその多くは不可触民であった。その人たちが抱きかかえ、食事を与え、治療を施した。そこにこそ宗教があるのであって、巨大構造物を建てるどころには事業家の野心があっても、宗教の片鱗もない。

私は宗教史的には、キリスト教に批判的な立場を取る者であるが、ことインドにおける宗教活動に関しては、キリスト教に軍配を上げざるを得ない。本部となっているマザーハウスでは、毎朝六時からミサが催される。開け放たれた窓からはカルカッタの街の喧騒が流れ込んでくるが、そこでひたすら祈りを捧げる百名以上のシスターの姿を見ていると、宗教の原点を突きつけられたような気になってくる。

カルカッタを去る日、私が最後に世話をさせてもらったのは、十代の若者であった。彼は極端にやせ細り、常に青ざめ、ベッドから起き上がることもしなかった。頭上の壁には、「糖尿病」という張り紙が貼られていた。他の患者とは、食事メニューが異なるという注意を呼ぶためのものである。

長くふせっていると床ずれをするので、ボランティアは時々、患者の体にココナッツ・オイルを塗りながら、マッサージすることがある。私も見よう見まねで、その子の体に触れてみたのだが、驚いたことに、まるで象の皮のように干からびてザラザラとしていた。おそらく親にも捨てられ、長年、路上で暮らしていたのだろう。笑顔というものが完全に消えていた。長く愛というものに触れていないのかもしれない。

私にできることは、ココナッツ・オイルを皮膚に擦り込むようにしながら、体をさすることだけであったが、私の手が彼の体に触れている間は、どこか安心したようにスヤスヤと眠っていた。この施設では人工透析もインシュリン治療も受けることがないため、遠からず彼の生命も蠟燭の灯が消えるように終わりを迎えるのかもしれない。先進国の富裕層に生まれ落ちておれば、腎臓移植

を受けて、健康な肉体を取り戻すこともできたかもしれないが、この子の魂はそのような運命の選択をしなかったらしい。彼が今という一瞬を少しでも安らかに過ごしてくれることを祈るしかなかった。

そこにあるのは、豊かな国からやってきたボランティアである私が、貧しく病めるインドの少年を介護するというのではなく、私という病める魂が、肉体を病むことによって汚れなき光のありかを指し示してくれている少年の魂に癒されているという事実だけであった。

誤解のないように言っておけば、人助けを実践するのに、なにもカルカッタまで出かける必要はまったくない。あなたの暮らす町にも、象の皮のように感情の潤いを失い、心がザラザラに荒れている人が数限りなくいるにちがいない。ほんの少しばかりの時間を割いて、その人たちに愛情というココナッツ・オイルを優しく擦り込むことは、それほど難しいことではないように思われるのだが、どうだろうか。

ボランティアのきっかけを作る

さて、日本の教育現場でもボランティア活動を義務づけるべきかどうかという議論があるものの、まだ結論が

出ないままになっていくようだ。ボランティアを義務づけるという発想自体がおかしいという意見があるからである。

私の個人的意見を述べれば、小学校高学年あたりからでもボランティア活動をカリキュラムとして位置づけるべきだ。なぜなら、国民性として受身になりがちな日本人は、何事も制度化されないと、実行に移さない傾向があるからだ。学校でボランティア体験のきっかけ作りだけを提供しておけば、後は個人の自主的判断に委ねればよいのである。利害関係なく、他者に奉仕することの喜びを知ることが、最高の情操教育であり、道徳教育でもあり得る。

近年、まったく他者への迷惑を考慮することのできない若者や、あまりにも軽々に自分や他人の肉体を傷つける若者が増える一方であるが、そういう社会現象に対して打つ手がないというのが現実だ。だからこそボランティア体験を通じて、人間の悲しみや弱さ、しかもそれでも生き抜こうとする人間の強さに、若者が共感する機会をもつことが、この上なく大切だ。

もし政府が徴兵制でも実施するとしても言い出したなら、命を賭してでも断固として反対すべきだが、ボラン

ティア活動をカリキュラムや課外活動に取り入れるといっただけで、国家権力の行使のように反対する人たちが出てくるのは理解しがたい。今、教育現場に山積する問題に対して、ほかに実効力のある教育方法があるというのなら別だが、たとえば実験的にでもボランティア活動の義務化を実施してみたらどうだろう。

アメリカでは上級の学校に進学する際、どのようなボランティアに年間どれだけの時間を費やしたかということが必ず問われる。名門校になればなるほど、そのことは合否決定の重要項目の一つとなる。将来、社会のエリートになるような人間が、社会奉仕の意志を持たなければ、優秀な教育を受けるだけの資質を欠くと考えられるからである。

私がプリンストン大学で教えていたとき、大多数の学生が何らかのボランティアをしていたが、中には刑務所の囚人に読み書きを教えたり、親に置き去りにされたスラムの子どもたちの遊び相手になったりする学生もいた。戦後日本は、アメリカ文化の歓迎すべからざる面を吸収するには素早いですが、讚えるべき面を取り込むには、まことに不熱心であるといわざるを得ない。

自らもボランティア活動を

大事なことは、学校が生徒にボランティア活動を義務づけたとしても、まず教師たちが率先して行動することだ。先生が汗水垂らして働く姿ほど、教育的なものはない。教室ではグウタラでも、ボランティアをしているときは、生徒たちが驚くほど輝き始める先生たちも少なからずいるのではなからうか。それでよいのである。

グウタラ親父である私は、息子たちにボランティアをしないと言ったことは一度もないが、彼らは高校生のときから、ネパールの山村で植林をしたり、新宿のホームレスの人たちに食事を与えるボランティアをしたりしていた。アメリカの大学生になった今も、精神病院のボランティアをしていると聞いている。シンガポールに暮らしていたときは、私が精神障害者の施設に出かけ、妻はどこで学んだのか、老人ホームで足裏マッサージをしていた。足裏をみながら、現地の高齢者から日本軍の虐待を受けた話をよく聞かされたらしい。日本に戻ってからも、妻はグウタラ亭主の私をほって置いて、またもや老人ホームに通っているから大したものだ。

昔のようにお寺に通って法話を聞いたり、坐禅をした

りする人たちは、このごろめつきり減ったが、現代社会におけるボランティア活動は、そういう伝統的精神修養に代わり得るものだと思う。ボランティアのような偽善的行為はまっぴら御免という人もいるだろうが、偽善者に成りすましてでも、ボランティアはやってみる価値がある。なぜなら、一時的にでも善人であるうちは、わがままが言えないからである。

ところで、子どもたちにボランティア活動を喜んで実践させるのに名案がある。それは一定の時間、ボランティアをした生徒には夏休みの宿題をチャラにすると約束すればよいのである。夏休みこそ子どもたちに大いに羽根を伸ばしてもらわなければいけないのに、ドリルの穴埋めをさせるのはナンセンスである。だから私の提案は一石二鳥だと思うのだが、やっぱりマジメな先生方のお叱りを受けるのだろうか。

日本が真に国際社会で認められるためには、もはや経済力だけでは通用しない。国民の一人ひとりが、何らかの形で社会貢献をしようという気概をもつことによつて、この国の「品格」を高めることが先決となる。そのためにも、学校教育にボランティア活動をしっかりと組み込んでほしい。